
鋼と奏

鉄 鉄男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼と奏

【Nコード】

N0623I

【作者名】

鉄 鉄男

【あらすじ】

世界を守る使命をおった長い黒髪に黒のワンピースに黒ネコのぬいぐるみを抱えた少女奏は、世界の悲鳴を聴いた場所へ赴き、世界を守るべく巨大ロボット鋼を操るのだった。

第一章 スクランブル交差点

第一章 スクランブル交差点

そこへ奏^{かな}がやってきた。

奏がやってきたのは、駅のすぐ側にあるスクランブル交差点で、大きな駅の側とあって、往来も激しく、信号が赤になればすぐに待機する人や車でいっぱいになった。

奏は駅に面している方に居て、左脇に手足の先が丸く、右目が○で左目が☆になっていて、にんまり笑ったように白い歯を見せている黒ネコのぬいぐるみを抱え、黒くて長い髪の毛と黒いワンピースのスカートを微かに揺らし、目をキョロキョロと動かしながら、何かを捜すように交差点の周辺を見渡していた。

そこへ服をダラしく着て口元にイヤらしい笑みを浮かべた二人組みの男が近付いてきて、”おねえちゃん、何しているの？”と声をかけてきた。

”世界の悲鳴を聴いたの”と奏は、男達に視線を向けずに言った。

その返事を聞いた二人組みは顔を見合わせ、一瞬怪訝な表情をしたものの、すぐに笑みを取り戻し、男の一人が”わけのわかんないこと言っていないで、俺達と一緒に楽しいところへ行こうぜ”と言って、奏に手を伸ばした。

そこへどこからともなく一本の釘が飛んできて、男の手の平を刺し貫いた。

男は悲鳴を上げ、真っ赤な血がどくどく出ている手の平を押さえながらその場にしゃがんだまま動けなくなり、もう一人の男は何が起こったのは理解できず、おろおろしているばかりだった。

奏は、何事も無かったように歩き出そうとしたところで足を止め、”見つけた”と呟くと、視線をスクランブル交差点に向け、歩き出した。

交差点は歩行者側の信号が赤で、横断歩道の前には信号待ちをしている人でいっぱいになっていたが、奏が近付ていくと見えない手で押されていくように、左右に押し退けられ、海が割れるように開けていった。

開けた人ごみを通して、車が往来している車道に一歩足を踏み入れると、奏から半径一メートル内の道路が突然、二メートルほど捲れ上がり、それによって捲れ上がった道路の内部居た車は勢いよくひっくり返し、外部に居た車は押し出されて後ろに待機している車とぶつかり、その車もまた後ろに居る車とぶつかっていくといった玉突き事故になった。

突然起こった大惨事に周囲の人々が慌てふためく中、奏は気にする様子もなく、横断歩道が交わっている中心部分に立って、黒ネコのぬいぐるみの口の中に手を入れ、中から一本のメスを取り出すと逆手に持って、道路に振り下ろした。

振り下ろされたメスは柔らかいものを刺したかのように道路に突き刺さり、そのまま切り下ろしていくと左右にぱっくりと割れ、奏は切り口の中へ身を投げるようにして飛び込んだ。

（挿入話）

女の子は泣いていました。

とてもとても悲しいことがあったからです。

女の子は涙が枯れるまで泣き続けました。

そこへ人でないものが現れてこう言いました。

「お前、世界を守る気は無いか？」

（挿入話終了）

切り口から出た奏が立っているのは、一面茶色で大きな岩山のよう
に隆起した場所と水溜りが点在している果てしなく広い大地に、
ぼんやりよりもさらに薄い青空に覆われたとても静かな空間だった。

「今回は随分と騒がしい場所から入ることになったもんだぜ」

声を出したのは、奏が左脇に抱えている黒ネコのぬいぐるみで、
相当なダミ声だった。

「それとな奏、ああいう場所に出る時には少しくらい警戒しろ。
お前は世界に守られているからいいだろうが、お陰で表面に被害が
出ちゃったじゃねえか」

奏は返事をせず、目の前にあるものに視線を向けていた。

目に前にあるのは、奏より何倍も大きい真っ黒なこぶみたいな形

をしたいかにも異物といった物体で、下方部は木の根っこのような形状で地面にしっかりと張り付き、地面から何かを吸い出しているかのように一定の間隔で脈打ち、上方部にはドロドロに溶けたような形をした信号機が、何本も生えていた。

奏は、巨大なこぶに怯える様子もなく、右手に持っているメスを慣れた手付きで投げた。

メスが刺さるとこぶはとても不快な声で、この空間の果てまで届きそうな悲鳴を上げた。

悲鳴が止むとこぶは信号機を吸収して、形を変え始め、巨大化すると同時に人のような形になり、手足は大きく末端肥大していて、体の表面には歩道線が入り、背中に何本もの信号機を生やしたこぶの時と同様に全体が真っ黒で、頭の丸い一つ目巨人になった。

巨人は巨大な瞳を奏に向けるなり、右拳を勢いを付けて振り下ろした。

「鋼」

自分に振り下ろされてくる巨大な拳に対して、奏は焦る様子も逃げる様子もなく、一言呟き、黒ネコのぬいぐるみを足元に落とした。

ぬいぐるみが、奏の影に吸収されるなり、足元から半透明な黒っぽいものが噴き出し、人の手のような形になって、巨人の右拳を受け止めた。

半透明なものはさらに溢れ出し、奏を包んで大きく盛り上がって、人のような形になっていくのに合わせ、表面が直線ラインでまとめ

られたぶ厚い金属の装甲のようになって、肩が斜めに大きく張り出し、肘には斜め上を向いた突起が付き、顔は両目で口元は頑丈そうなマスクに覆われ、頭部は兜に似た形で、額に先の鋭い二本の突起が付き、背中には四基のノズルと左右に巨大な翼の付いたバックパックを背負い、赤・青・黄色のトリコロールカラーがバランス良く配色された巨大ロボットとなった。

巨大ロボットの内部に居る奏は、周囲の風景を映している空間の中心部にて、丸い円形のステージのようなものの上に乗る、目の前にあるピアノの鍵盤に似た計器を左手で操作した。

鋼と呼ばれた巨大ロボットは、奏での操作に合わせて、左指を折り曲げ、巨人の右拳を一瞬にして、握り潰し、真っ黒な液体を撒き散らした。

巨人は、こぶ状の時と同様の悲痛な悲鳴を上げつつ、反撃しようと左拳で殴りかかってきたが、鋼は拳が届く前にその場でジャンプして、両足を突き出したドロップキックを巨人の胸にぶち当て、凄まじい衝撃音と共に蹴り飛ばした。

巨人は体を何度も地面に打ち付けながら転がっていき、勢いが止まったところで、立ち上がるなり、ふんばるような姿勢を取ると、歩道線の白い部分が一斉に左右に開いて、ミサイルの発射口のようなものが現れ、内部から白くて先の尖ったミサイルもどきが大量に発射され、白くて長い煙の尾を描きながら鋼に向かって飛んでいった。

「ツインバルカン」

奏が一言呟いて、右手にある計器を操作すると、鋼は右腕を前方に突き出し、それに合わせて右腕の外側の装甲が左右に開き、中か

ら二門のバルカン砲がせり上がってきて、砲門から無数の弾丸を発射して、ミサイルもどきを次々に撃破し、その爆発によって発生した大量の黒い煙によって鋼の前方に黒い煙の幕が出来上がった。

ミサイルもどきを全て撃破した鋼は、ツインバルカンをしまって走り出し、大地に足を付ける毎に地面を削るほどの地響きと轟音を鳴り響かせながら、黒い幕を突っ切って巨人に向かっていった。

巨人は向ってくる鋼に対して、右拳を大きく膨らませ、それと同時に背中に生えている信号機を引っ込めて、丸く膨らんだ右拳に生やし、ハンマーのような形に変形させ、鋼に向って縦軸に振り下ろした。

鋼は体勢を右側にズラして、ハンマーを避けた後、エルボークラッシュを首筋にヒットさせ、続けて左膝キックを腹部にヒットさせ、巨人が上体を前に大きく反らしたところへ、体をおもいっきり縦に伸ばすと共に繰り出された右拳からのアッパーを顎にクリーンヒットさせて、地面に殴り倒したところへ、馬乗りになって、顔面がグシャグシャになるまで殴った後、首を掴んで持ち上げ、勢いを付けた右ストレートパンチを顔面に当てて、殴り飛ばした。

「バスターソード」

奏が呟いて、鍵盤を操作すると鋼の腰のスカート状の装甲の左脇が外側にスライドして、内部から剣の柄のようなものが現れ、右手で掴んで引っ張り出すと柄の先から刃が飛び出し、巨大な剣になった。

鋼は柄を両手で掴んで刃を巨人に向ける構えを取った後、背中と足底のバーニアを噴射して勢いよく飛び出し、剣を左斜め後ろに引

いた姿勢で、巨人に向っていった。

立ち上がった巨人は向ってくる鋼に対し、ハンマー状の右拳を飛ばしてきた。

鋼は飛んでくる右拳に対して、剣を横一直線に振って、横軸に真っ二つにし、巨人との距離が近付いたところで、剣を斜め左下に勢いを付けて振り下ろしながら、巨人の真後ろで停止した。

数秒後、巨人は袈裟懸けに斬られた腹部から黒い液体を吹き上げ、風船が破裂するように四散して、周囲に真っ黒な液体をぶちまけた。

巨人が立っていた場所には複数の信号機が折り重なっていて、鋼は信号機を右手で鷲づかみにして口元まで持っていくと、硬そうなマスク部分がバツの字に開き、その中に信号機を入れ、バリバリと噛み砕く音を立てながら貪り食った。

信号機を食べ終えた鋼の体は縮み始め、奏の体が表面に現れると共に、黒ネコのぬいぐるみサイズに戻って、巨大ロボットになる前と同じように左脇に抱えられた。

奏は鋼の腹の中から新しいメスを出して、地面を切って、開き口を通るとスクランブル交差点の前に出た。

道路はメスで切られる前と同じく左右に大きく捲れたままで、周囲の人々はこのことと玉突き事故に意識が集中しているせいで、奏が戻ってきたことにも信号機が何か巨大なものでえぐられたようにざっくりと削り取られていることにも、気付く様子は無かった。

周囲の人々が騒いでいるのをよそに奏は駅の中の女子トイレに向

かい、一番奥に入って、鋼のおしりを便器に向け、腹をぎゅつと絞ると、お尻の穴から真っ黒なゲル状のものが出てきて、便器の中に落ちて独特な動きをみせた。

「ふう、トイレが近くて助かったぜ」

鋼がとてもすっきりした声で言った。

「臭いわ」

奏は便器から顔を背けながら、レバーを捻って、黒い物体を跡形もなく流した。

「しょうがねえだろ。世界の汚れの食いカスなんだからよ」

〈第一章 終〉

第一章 スクランブル交差点（後書き）

いかがでしたでしょうか？ こういったwebでの小説投稿というのは初めてなので、まだまだ拙い部分がありますが、今後ともお付き合いいただければ幸いです。

第二章 図書館

そこへ奏がやってきた。

奏がやってきたのは、白塗りで二階建ての図書館で、入り口の自動ドアを通して、中に入ると足を止め、何かを捜すように目をキョロキョロさせながら周囲を見回した。

そんな奏の様子に入り口のすぐ側の受付に座っている人の良さそうなおばさんが、”何かお探しですか？”と声をかけると奏は”ここから世界の悲鳴が聴こえたの”と当たり前のような返事をした。

奏の返事を聞いたおばさんが、何を言っているのかといった顔で、ぽかんと口を開けている中、奏は視線を階段へ向け、長い黒髪と真っ黒なワンピースの裾を揺らしながら、階段を昇っていった。

二階は、一階と同じく入り口の側に貸し出し用の受付があつて、南と西側に本棚が並び、北と東側に閲覧用の机と検索用のパソコンが置かれていて、読書や学校の課題や本の検索したりといった老若男女の人々が集まっていた。

奏は、図書館に入ってきた時と同じように目をキョロキョロさせながら北側から順繰りに見回していった。

椅子に座っている者達は、奏が側を通るとちらつと視線を向けるだけで、特に気にする様子も無かった。

北と東と南を見終わり、本棚が密集している西側に向った奏は、本には一切目もくれず、辺りをくまなく見回した後、入室禁止とい

う札の着いたプラスチックの鎖の柵が降ろされている一階と二階の間の部屋へ行く為の階段の前で足を止め、”見つけた”と誰にでもなく呟いた後、柵を上げて階段を降りていった。

それを見ていた図書館の職員が、奏を止めようと歩き出したところで、背後の本棚が音も無く倒れて、職員の上に覆い被さって、動けなくした。

階段を降りたその部屋には、上にある本とは比べ物にならないくらいにぶ厚く持ち出し禁止の判子が押された本が、本棚にぎっしりと詰まっていて、そのせいか空気もどこか重く感じられた。奏はその中の特に古いと思われる本が並べられた本棚に視線を定めると、左脇に抱えている黒ネコのぬいぐるみ状態にある鋼の口の中に手を入れ、一本のメスと取り出し、本棚に向かって突き立てて、刺したところで、さっと下に振り下ろした。

それによって本棚は肉を切ったようにぱっくりと左右に割れ、奏はその中に入っていた。

（挿入話）

「世界を守るって？」

少女は人で無いものに尋ねました。

「言葉通り、お前が今居るこの部屋、学校、目に見える全てのものが存在するこの世界を守るのさ」

「なにから世界を守るの？」

「世界が生み出す、”汚れ”からだよ」

く挿入話 終了く

切り口を通った奏は、地平線の先まで続き、大きく隆起した岩山と水溜りが点在する茶色の大地とぼんやりとした青空で覆われた世界の内部に立っていた。

「今回は静かな場所かと思えば、出た場所はこのところかよ」

ぬいぐるみ状態の鋼が、ダミ声を発した。

奏が今居る場所は、大きめの岩山の上で、正面には世界の汚れである真っ黒で巨大なこぶが、岩山にしっかり根を張り、上の部分にはドロドロに溶けたぶ厚い本が何冊もくっついていた。

奏が、こぶに向かってメスを投げて、突き刺さるところは、この空間全てに聞こえるような悲鳴を上げた後、本を吸収して巨大な姿に変形し始め、そうした中一冊の本を奏に向かって飛ばしてきた。

「鋼」

一言呟いて、奏がぬいぐるみを足元に落とすと、ぬいぐるみは足元の影に吸い込まれ、その後に半透明の黒っぽいものが溢れ出し、足のような形になって、本ごと汚れを岩山の上から蹴り飛ばした。

奏は半透明なものを出した状態のまま、岩山の先端に行って、下を覗き込んで見ると、汚れはムカデのような形になり、生き物とは思えない不気味な唸り声を奏の立っている方を向いて、挑発するようにならせた。

その声を聞いた奏はなんの迷いもなく岩山から飛び降り、髪とスカートが上へおもいきり靡かせながら、空中を落下している間に半透明のものは、奏をすっぽりと覆い尽して人の形になっていき、表面は直線ラインでまとめられた金属のぶ厚い装甲のようになり、釣り目で赤・青・黄色のトリコロールカラーがバランスよく配色された巨大ロボットになって、轟音を鳴り響かせながら着地した。

汚れは、再度唸り声を上げると、本物のムカデのように体をくねらせ、無数の足を動かしながら、見た目の巨体からは想像もできないほどのスピードで、鋼に迫り、覆い被さるようになり、上体を持ち上げた。

鋼は右側に飛んで避けると、目標を外した巨体は岩山に激突し、その重さによって、岩山はボロボロに崩れ、その間に後ろに回り込むと尻尾を両手で掴んで、右足を中心に体を回転させて、汚れを振り回し、勢いの付いたところで、両手を離して、汚れを地面に叩きつけた。

地面に叩き付けられた汚れは轟音と共に体半分が地面に沈んだものの、何事も無かったように、すぐさま体を起こして、鋭く尖った足の先端を勢いよく伸ばしてきた。

鋼は、背中と足底のバーニアを噴射して、上空に飛んで、足をかわした。

「グレネードミサイル」

奏が一言呟いて、鍵盤を操作すると、鋼の両足の外側の装甲が、横方向にスライドして、中からミサイル発射口が現れ、そこから発

射された無数のミサイルが白い尾を引いて、汚れに向かって飛んで行き、汚れとその付近で爆発し、それによって発生した黒い煙によって、汚れの居る周辺が見えなくなった。

鋼が、爆発のあった場所へ降下していき、バーニアの噴射によって、煙が晴れていくと、汚れの姿はどこにも無く、地面に巨大な穴が空いているだけだった。

そして鋼が、着地した直後、後方の地面を掻き分けて姿を現した汚れが、襲い掛かってきた。

鋼は、体を前に投げ出し、両手を地面に着けて倒立前転して、汚れの攻撃をかわし、両足を地面に付けて、体勢を立て直した時には、汚れはすでに地面の中に潜った後で、姿はどこにも見えなかった。

「ツインバルカン・ダブルキャノン」

奏の鍵盤を操作に合わせて、鋼は両腕からツインバルカンを出し、銃口を地面に向けた姿勢のまま、汚れが出てくるのを待った。

しばらくの静寂の後、鋼の左側の地面から微かな音がして、地面から何かが出てきた瞬間、鋼は両腕のツインバルカンを発射したが、汚れは現れず、四門の銃口から発射される弾が、音がした部分を勢いよく削っていったいくけたった

鋼が、ツインバルカンを撃つのを止め、体の向きを変えた直後汚れが、鋼が立っている右側から飛び出し、鋼の右わき腹に体当たりして、地面に押し倒して、覆い被さった。

鋼は、汚れをどかそうと両腕を動かしたが、全く動かず、ツイン

バルカンを発射し、足を破壊したが、汚れは怯むことなく、鋼を頭から喰らおうという感じで、口を大きく開け、無数の尖った牙を近づけてきた。

内部に居る奏が、焦る様子も無く鍵盤を両手で強く叩くと、鋼の両腕は力を得たように、汚れをゆっくりと持ち上げて、体から離れていき、さらに背中中のバーニアを噴射することで、上半身を起こしていった。

「ジャイアントミサイル」

奏の鍵盤操作に合わせて、鋼の腹部中央のパーツが左右に開き、中から名前通りの巨大なミサイルが発射され、汚れの体の真ん中に命中し、噴射の勢いで鋼から離れた辺りで、爆発して、体の下半分を吹き飛ばした。

地面に落ちた汚れの上半分は、体が半分無くなったにもかかわらず、怯むことなく再度鋼に向ってきた。

鋼は走って、汚れに接近し、上唇と下唇を掴んだ後、口の中に右膝を強引にねじ込んで、力任せに引き下げ、汚れを口から引き裂いていった。

「バスターソード」

奏の操作で腰からバスターソードを出して、両手で構えた鋼は、大きく振りかぶって、汚れを縦軸に真っ二つにした。

汚れは四散し、黒い液体を周囲にぶちまけ、その跡にはぶ厚い本が無造作に重ねられていた。

鋼は、本を驚？みして、口まで持っていき、十字に開いた口の中に入れて、バリバリと音を立てながら貪り食った。

汚れの元凶を食い終えた鋼が、元のぬいぐるみに戻ると奏では口の中から新しいメスを出し、地面を切って、世界の外部へと戻った。そこは図書館の玄関の前だった。

奏は、鋼の中にある汚れの食いカスを出そうと、図書館の中へ入ろうとしたが、すでに閉館時間になっていたので、中には入れず、入り口の脇の壁で排泄を行い、それによって真っ白な壁が真っ黒なもので染め上げられていった。

「こんな場所で排泄することになるなんて、恥ずかしいったらないぜ」

鋼が不機嫌そうな声で言った。

「いいんじゃない、元々はここの中のものだったんだし」

奏は特に気にすることもなく言った。

第二章 図書館（後書き）

前回は外での出来事だったので、今回は室内にしてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0623i/>

鋼と奏

2010年10月28日04時21分発行